

幻影の盾

夏目漱石

青空文庫

一心不乱と云う事を、目に見えぬ怪力をかり、
 縹ひようびよう 緲びようたる背
 景の前に写し出そうと考えて、この趣向を得た。これを日本の物
 語に書き下おろさなかつたのはこの趣向とわが国の風俗が調和すまい
 と思うたからである。浅学にて古代騎士の状況に通ぜず、従つて
 叙事妥当を欠き、描景真相を失する所が多かろう、読者の誨おしえを待
 つ。

遠き世の物語である。バロンと名乗るものの城を構ほりえ濠めぐを環ら
 して、人を屠ほふり天おとに驕おごれる昔に帰れ。今きん代だいの話ではない。
 何時いつの頃とも知らぬ。只アーサーたいおう大王の御代とのみ言い伝え

たる世に、ブレトンの一士人がブレトンの一女子に懸想けそうした事がある。その頃の恋はあだには出来ぬ。思う人の唇くちびるに燃ゆる情けの息を吹く為には、吾肱わがひじをも折らねばならぬ、吾頸くびをも挫くじかねばならぬ、時としては吾血潮さえ容赦もなく流さねばならなかつた。懸想されたるブレトンの女は懸想せるブレトンの男に向つて云う、君が恋、叶かなえんとならば、残りなく円卓の勇士を倒して、われを世に類たぐいなき美しき女と名乗り給え、アーサーの養える名高き鷹たかを獲て吾許もとに送り届け給えと、男心得たりと腰に帯びたる長き剣つるぎに盟ちかえば、天上天下に吾志を妨ぐるものなく、遂ついに仙姫せんきの援たすけを得て悉く女の言うところを果す。鷹の足を纏まとえる細き金の鎖の端はしに結びつけたる羊皮紙を読めば、三十一カ条の愛に関する法章であ

つた。所謂「愛の序」の憲法とはこれである。……盾の話は

この憲法の盛に行われた時代に起つた事と思え。

行く路を扼すとは、その上騎士の間に行われた習慣である。幅

広からぬ往還に立ちて、通り掛りの武士に戦を挑む。二人の槍の

穂先が撓つて馬と馬の鼻頭が合うとき、鞍壺にたまらず落ち

たが最後無難にこの関を踰ゆる事は出来ぬ。鎧、甲、馬諸共に

召し上げらるる。路を扼する侍は武士の名を藉る山賊の様なもの

である。期限は三十日、傍の木立に吾旗を翻えし、喇叭を吹いて

人や来ると待つ。今日も待ち明日も待ち明後日も待つ。五六三十

日の期が満つるまでは必ず待つ。時には我意中の美人と共に待つ

事もある。通り掛りの上臈は吾を護る侍の鎧の袖に隠れて関

を抜ける。守護の侍は必ず路を扼する武士と槍を交える。交えねば自身は無論の事、二世にせかけて誓える女によし性しょうをすら通す事は出来ぬ。千四百四十九年にバーガンデの私生子と称する豪のものがラ・ベル・ジャルダンと云える路を首尾よく三十日間守り終おせたるは今に人の口碑に存する逸話である。三十日の間私生子と起居を共にせる美人は只「清き巡礼の子」という名にその本名を知る事が出来ぬのは遺憾いかんである。……盾の話はこの時代の事と思え。

この盾は何時の世のものとも知れぬ。パヴィースと云うて三角を倒さまにして全身おを蔽おう位な大きさに作られたものとも違ちがう。ギージうしという革かわ紐ひもにて肩から釣かるす種類でもない。上部に鉄てつの格こ子を穿あけて中央の孔から鉄砲を打つと云う仕懸しかけの後世のものでは

無論ない。いずれの時、何者が鍊きたえた盾かは盾の主人なるウイリアムさえ知らぬ。ウイリアムはこの盾を自己の室へやの壁に懸けて朝ちようせき
 夕よ眺めてゐる。人が聞くと不可思議な盾だと云う。靈の盾だと云う。この盾を持つて戦に臨むとき、過去、現在、未来に涉わたつて吾願を叶える事のある盾だと云う。名あるかと聞けば只まぼろし幻影の盾と答える。ウイリアムはその他を言わぬ。

盾の形は望もちの夜の月の如く丸い。鋼はがねで饅まんじゅう頭形まねじりの表を一面に張りつめてあるから、輝やける色さえも月に似ている。縁ふちを繞めぐりて小指の先程びょうの鋏びょうが奇麗きれいに五分程の間を置いて植えられてある。鋏かの色もまた銀色である。鋏かの輪の内側は四寸ばかりの円かくを画かくして匠人の巧を尽したる唐草からくさが彫り付けてある。模様があまり細

か過ぎるので一寸見ると只不規則の漣漪が、肌はだに答えぬ程の微風かぜに、数え難き皺しわを寄する如くである。花か蔦つたか或あるは葉か、所々が劇はげしく光線を反射して余所よそよりも際立きわだちて視線を襲うのは昔し象ぞうがん嵌はのあつた名残でもあろう。猶内側へ這入はいると延板のべいたの平らかな地になる。そこは今も猶鏡の如く輝やいて面にあたるものは必ず写す。ウイリアムの顔も写る。ウイリアムの甲さしげの挿毛さしげのふわふわと風に靡なびく様も写る。日に向けたら日に燃えて日の影をも写さう。鳥を追えば、こだまさえ交えずに十里を飛ぶ俊しゅんこつ 鶻こつの影も写さう。時には壁から卸して磨みがくかとウイリアムに問えば否と云う。霊の盾は磨かねども光るとウイリアムは独り語ひとごとの様に云う。

盾の真中まんなかが五寸ばかりの円を描いて浮き上る。これには怖ろ

しき夜叉やしやの顔が隙間すきまもなく鑄出いいたされている。その顔は長とこしえに天
 と地と中間にある人のろとを呪う。右から盾を見るときは右に向つて
 呪い、左から盾を覗のぞくときは左に向つて呪い、正面から盾むかに対う
 敵には固もとより正面を見て呪う。ある時は盾の裏にかくるる持主を
 さえ呪いはせぬかと思わるる程怖しい。頭かしらの毛は春夏秋冬の風に
 一度に吹かれた様に残りなく逆立っている。しかもその一本一本
 の末は丸く平たい蛇へびの頭となつてその裂け目から消えんとしては
 燃ゆる如き舌を出している。毛と云う毛は悉く蛇で、その蛇は悉
 く首を擡もたげて舌を吐いて纏もつるるのも、捻ねじ合うのも、攀よじあがる
 のも、にじり出るのも見らるる。五寸の円の内部に獐どうあく悪なる夜
 叉の顔を辛うじて残して、額際から顔の左右を残なく填うずめて自然じねん

に円の輪廓りんかくを形ちづくつてゐるのはこの毛髪けあはの蛇、蛇の毛髪けあはである。遠き昔しのゴーゴンとはこれであろうかと思わゆる位だ。ゴーゴンを見る者は石に化すとは当時の諺ことわざであるが、この盾を熟視する者は何なんびと人もその諺のあながちならぬを覚さとるであろう。盾には創きずがある。右の肩から左へ斜はすに切りつけた刀の痕あとが見える。玉を並べた様な鋏びようの一つを半ば潰つぶして、ゴーゴン・メジューサに似た夜叉の耳のあたりを纏まとう蛇の頭を叩いて、横に延板きずの平な地へ微かすかな細長い凹くぼみが出来ている。ウイリアムにこの創きずの因縁を聞くと何なんにも云わぬ。知らぬかと云えば知ると云う。知るかと云えば言い難しと答える。

人に云えぬ盾の由来の裏には、人に云えぬ恋の恨みが潜んでい

る。人に云わぬ盾の歴史の中には世もいらぬ神もいらぬとまで思
 いつめたる望の綱が繋がれている。ウイリアムが日毎夜毎に繰り
 返す心の物語りはこの盾と浅からぬ因果の羈絆で結び付けられて
 いる。いざという時この盾を執つて……望はこれである。心の奥
 に何者かほのめいて消え難き前世の名残の如きを、白日の下に引
 き出して明ら様に見極むるはこの盾の力である。いづくより吹く
 とも知らぬ業障の風の、隙多き胸に洩れて目に見えぬ波の、
 立ちては崩れ、崩れては立つを浪なき昔、風吹かぬ昔に返すはこ
 の盾の力である。この盾だにあらばとウイリアムは盾の懸かれる
 壁を仰ぐ。天地人を呪うべき夜叉の姿も、彼が眼には画ける天
 女の微妙に笑を帯べるが如く思われる。時にはわが思う人の肖

像ではなきかと疑う折さえある。只抜け出して語らぬが残念である。

思う人！ ウイリアムが思う人はここには居らぬ。小山を三つ越えて大河を一つ渉りて二十哩先の夜鴉の城に居る。夜鴉の城とは名からして不吉であると、ウイリアムは時々考える事がある。然しその夜鴉の城へ、彼は小児の時度々遊びに行つた事がある。小児の時のみではない成人してからも始終訪問れた。クララの居る所なら海の底でも行かすにはいられぬ。彼はつい近頃まで夜鴉の城へ行つては終日クララと語り暮したのである。恋と名がつけば千里も行く。二十哩は云うに足らぬ。夜を守る星の影が自ずと消えて、東の空に紅殻を揉み込んだ様な時刻に、白城の刎橋

の上に騎馬の侍が一人あらわれる。……宵の明星が本丸の櫓の北角にピカと見え初むる時、遠き方より又蹄の音が昼と夜の境を破つて白城の方へ近づいて来る。馬は総身に汗をかいて、白い泡を吹いているに、乗手は鞭を鳴らして口笛をふく。戦国のならい、ウイリアムは馬の背で人と成つたのである。

去年の春の頃から白城の刎橋の上に、暁方の武者の影が見えなくなつた。夕暮の蹄の音も野に逼る黒きものの裏に吸い取られか、聞えなくなつた。その頃からウイリアムは、己れを己れの中へ引き入るる様に、内へ内へと深く食い入る気色であつた。花も春も余所に見て、只心の中に貯えたる何者かを使い尽すまではどうあつても外界に気を転ぜぬ様に見受けられた。武士の命は女

と酒と軍さである。吾思う人のためにと箸はしの上げ下しに云う誰たれか彼れに倣ならつて、わがクララの為めにと云わぬ事はないが、その声の咽喉のどを出る時は、塞ふさがる声帯を無理に押し分ける様であつた。血の如き葡萄の酒を罍どくろ形さかずきの盃にうけて、縁越すことをゆるさじと、髭ひげの尾まで濡ぬらして呑み干す人の中に、彼は只額を抑えて、斜めに泡を吹くことが多かつた。山と盛る鹿の肉に好味とうの刀ふるを揮う左も顧みず右も眺めず、只わが前に置かれたる皿のみを見詰めて済す折もあつた。皿の上に堆うずたかき肉塊の残らぬ事は少ない。武士の命を三分ぶんして女と酒と軍さいくがその三カ一を占むるならば、ウイリアムの命の三分ぶ二は既に死んだ様なものである。残る三分一は？ 軍いくさはまだない。

ウイリアムは身の丈六尺一寸、瘦せてはいるが満身の筋肉を骨格の上へたたき付けて出来上った様な男である。四年前の戦にも棄て、鎧も脱いで丸裸になって城壁の裏に仕掛けたる、カタパルトを彎いた事がある。戦が済んでからその有様を見ていた者がウイリアムの腕には鉄の瘤が出るといった。彼の眼と髪は石炭の様に黒い。その髪は渦を巻いて、彼が頭を掉る度にきらきらする。彼の眼の奥には又一双の眼があつて重なり合っている様な光りと深さが見える。酒の味に命を失い、未了の恋に命を失いつつある彼は来るべき戦場にもまた命を失うだろうか。彼は馬に乗って終日終夜野を行くに疲れた事のない男である。彼は一片の麵麩も食わず一滴の水さえ飲まず、未明より薄暮まで働き得る男である。

年は二十六歳。それで戦が出来ぬであろうか。それで戦が出来ぬ位なら武士の家に生れて来ぬがよい。ウイリアム自身もそう思っている。ウイリアムは幻影の盾を翳して戦う機会があれば……と思っ

白城の城主狼のルーファスと夜鴉の城主とは二十年来の好みで家の子郎党の末に至るまで互に往き来せぬは稀な位打ち解けた間柄であつた。確執の起つたのは去年の春の初からである。原因は私ならぬ政治上の紛議の果とも云い、あるは鷹狩の帰りに獲物争いの口論からと唱え、又は夜鴉の城主の愛女クララの身の上に係る衝突に本づくとも言触らす。過ぐる日の饗筵に、卓上の酒尽きて、居並ぶ人の舌の根のしどろに緩む時、首席を占むる隣

り合せの二人が、何事か声高こわだかに罵る声のしを聞かぬ者はなかつた。
「月に吠ゆる狼おおかみの……ほぎくは」と手にしたる盃なげうを地に抛つて、
夜鴉の城主は立ち上る。盃の底に残れる赤き酒の、斑まだらに床を染
めて飽きたらず、摧くだけたる觥こうへん片と共にルーファスの胸のあたり
まで跳ね上る。「夜迷よまい烏の黒き翼を、切つて落せば、地獄やみの闇
ぞ」とルーファスは革に釣る重き剣に手を懸けてするすると四五
寸ばかり抜く。一座の視線は悉く二人の上に集まる。高き窓洩る
夕日を脊に負う、二人の黒き姿の、この世の様とも思われぬ中に、
抜きかけた剣のみが寒き光を放つ。この時ルーファスの次に座を
占めたるウイリアムが「渾名あだなこそ狼なれ、君が剣きさに刻める文字に
耻はじずや」と右手めてを延ばしてルーファスの腰のあたりを指す。幅

広き刃の鏢の真下に pro gloria et patria と云う銘が刻んである。水を打った様な静かな中に、只ルーファスが抜きかけた剣を元の鞘に収むる声のみが高く響いた。これより両家の間は長く中絶えて、ウイリアムの乗り馴れた栗毛の馬は少しく肥えた様に見えた。

近頃は戦さの噂さえ頻りである。睚眦の恨は人を欺く笑の衣に包めども、解け難き胸の乱れは空吹く風の音にもざわつく。夜となく日となく磨きに磨く刃の冴は、人を屠る遺恨の刃を磨くのである。君の為め国の為めなる美しき名を藉りて、毫釐の争に千里の恨を報ぜんとする心からである。正義と云い人道と云うは朝嵐に翻がえす旗にのみ染め出すべき文字で、繰り出す槍の穂先には瞋恚のが焼け付いている。狼は如何にして鴉と戦うべき口実

を得たか知らぬ。鴉は何を叫んで狼を誣ゆる積りか分らぬ。只時ならぬ血潮とまで見えて迸ほとばしりたる酒の雫しずくの、胸を染めたる恨を晴さでやとルーファスがセント・ジョージに誓えるは事實である。尊き銘は劍にこそ彫れ、抜き放ちたる光の裏うちに遠吠ゆる狼を屠らしめたまえとありとあらゆるセイントに夜鴉の城主が祈念を凝こらしたるも事實である。両家の間の戦は到底免かれない。いつと
いうだけが問題である。

末の世の尽きて、その末の世の残るまでと誓いたる、クララの
一門に弓をひくはウイリアムの好まぬところである。手創てきず負いて
斃たおれんとする父とたよりなき吾われとを、敵の中より救いたるルーファス
の一家いっけに事ありと云う日に、膝ひざを組んで動かぬのはウイリア

ムの猶好まぬところである。封建の代のならい、主と呼び従と名
 乗る身の危きに赴かおもむで、人に卑怯ひきようと嘲けらるるは彼の尤も好ま
 ぬところである。甲も着ようかぶと、鎧も繕おうよろい、槍も磨こう、すわと
 いう時は真先に行こう……然しクララはどうなるだろう。負けれ
 ば打死をする。クララには逢えぬ。勝てばクララが死ぬかも知れ
 ぬ。ウイリアムは覚えす空に向つて十字を切る。今の内姿を窺しやつ
 て、クララと落ち延びて北の方へかたでも行こうか。落ちた後で朋ほうば
 輩が何というだろう。ルーファスが人でなしと云うだろう。内うち
ぶところ懐からクララのくれた一束ねの髪の毛を出して見る。長い薄
 色の毛が、麻を砧きぬたで打つて柔かにした様にゆるくうねつてウイリ
 アムの手から下がる。ウイリアムは髪を見詰めていた視線を茫ぼうぜ

然とわきへそらす。それが器械的に壁の上へ落ちる。壁の上に
かけてある盾の真中で優しいクララの顔が笑っている。去年分れ
た時の顔と寸分違たがわぬ。顔の周囲を巻いている髪の毛が……ウイ
リアムは呪われたる人の如くに、千里の遠きを眺めている様な眼
付で石の如く盾を見ている。日の加減か色が真青だ。……顔の周
囲を巻いている髪の毛が、先さきつきから流れる水に漬けた様にざわ
ざわと動いている。髪の毛ではない無数の蛇の舌が断間なく震動
して五寸の円の輪を揺り廻るので、銀地に絹糸の様に細い炎が、
見えたり隠れたり、隠れたり見えたり、渦を巻いたり、波を立て
たりする。全部が一度に動いて顔の周囲を廻転するかと思うと、
局部が纔わずかに動きやんで、すぐその隣りが動く。見る間に次へ次

へと波動が伝わる様にもある。動く度たびに舌の摩すれ合う音でもある。微かな声が出る。微かではあるが只一つの声ではない、漸ようやく鼓膜に響く位の静かな音のうちに——無数の音が交っている。耳に落つる一の音が聴けば聴く程多くの音がかたまつて出来上つた様に明かに聞き取られる。盾の上に動く物の数多きだけ、音の数も多く、又その動くものの定かに見えぬ如く、出る音も微かすかであららかに鳴らぬのである。……ウイリアムは手に下げたるクララの金毛を三たび盾に向つて振りながら「盾！ 最後の望は幻影まぼろしの盾にある」と叫んだ。

戦うしおは潮の河に上る如く次第に近付いて来る。鉄を打つ音、鋼はがねを鍛きたえる響、槌つちの音、やすりの響は絶えず中庭の一隅に聞える。ウ

イリアムも人に劣らじと出陣の用意はするが、時には殺伐な物音
 に耳を塞いで、高き角すみやぐら櫓のぼに上つて遙かに夜鴉の城の方を眺め
 る事がある。霧深い国の事だから眼に遮さえぎる程の物はなくても、
 天氣の好い日に二十哩マイル先は見えぬ。一面に茶渋を流した様な曠野
 が逼せまらぬ波を描いて続く間に、白金しろがねの筋あざやが鮮かに割り込んでい
 るのは、日毎の様に浅瀬を馬で渡した河であろう。白い流れの際
 立ちて目を牽ひくに付けて、夜鴉の城はあの見当だなど見送る。城
 らしきものは霞かすみの奥おくに閉じられて眸ぼうてい底には写らぬが、流るる銀しろがね
 の、烟けむりと化しはせぬかと疑うたがわるまで末広に薄れて、空と雲との境
 に入る程は、翳かげしたる小手こての下より遙かに双まなこの眼あつに聚あつまつてくる。
 あの空とあの雲の間が海で、浪の嚙かむ切きつ立ち岩の上に巨巖きよがんを刻

んで地から生えた様なのが夜鴉の城であると、ウイリアムは見えぬ所を想像で描き出す。若しその薄黒く潮風に吹き曝された角窓の裏に一人物を画き足したなら死竜は忽ち活きて天に騰るのである。天晴に比すべきものは何人であろう、ウイリアムは聞かんでも能く知っている。

目の廻る程急がしい用意の為に、昼の間はそれとなく気が散つて浮き立つ事もあるが、初夜過ぎに吾が室に帰つて、冷たい臥床の上に六尺一寸の長軀を投げる時は考え出す。初めてクララに逢つたときは十二三の小供で知らぬ人には口もきかぬ程内気であつた。只髪の毛は今の様に金色であつた……ウイリアムは又内懐からクララの髪の毛を出して眺める。クララはウイリアム

を黒い眼の子、黒い眼の子と云つてからかった。クララの説によると黒い眼の子は意地が悪い、人がよくない、猶ユダヤ太人かジプシイでなければ黒い眼色のものはない。ウイリアムは怒つて夜鴉の城へはもう来ぬと云つたらクララは泣き出して堪かんにん忍にんしてくれと謝した事がある。……二人して城の庭へ出て花を摘んだ事もある。

赤い花、黄な花、紫の花——花の名は覚えておらん——色々の花でクララの頭と胸と袖を飾つてクイーンだクイーンだとその前にひざま跪ひざまずいたら、槍を持たない者はナイトでないとクララが笑つた。

……今は槍もある、ナイトでもある、然しクララの前に跪く機会たんばんはもうあるまい。ある時は野へ出て蒲公英たんぽぽの蕊しべを吹きくらしをした。花が散つてあとに残る、むく毛つかを束ねた様に透明な球をとつてふ

つと吹く。残った種の数でうらないをする。思う事が成るかならぬかと云いながらクララが一吹きふくと種の数が一つ足りないの
で思う事が成らぬと云う辻つじうらであつた。するとクララは急に元
気がなくなつて俯向うつむいてしまつた。何を思つて吹いたのかと尋ね
たら何でもいいと何時じになく邪慳じゃけんな返事をした。その日は碌ろくろ
々く口もきかないで塞ふさぎ込んでいた。……春の野にありとあらゆ
る蒲公英をむしつて息の続つづかぬまで吹き飛ばしても思う様な辻
占は出ぬ筈だとウイリアムは怒る如くに云う。然しまだ盾と云う
頼みがあるからと打消すように添える。……これは互に成人して
からの事である。夏を彩いろどる薔薇ばらの茂みに二人座をしめて瑠璃るりに
似た青空の、鼠色ねずみいろに変わるまで語り暮した事があつた。騎士の恋に

は四期があると云う事をクララに教えたのはその時だとウイリアムは当時の光景を一度に目の前に浮べる。「第一を躡躑の時期と名づける、これは女の方でこの恋を斥けようか、受けようかと思ひ煩う間の名である」といいながらクララの方を見た時に、クララは俯向いて、頬のあたりに微かなる笑を漏した。「この時期の間には男の方では一言も恋をほのめかすことを許されぬ。只眼にあまる情けと、息に漏るる嘆きとにより、昼は女の傍えを、夜は女の住居の辺りを去らぬ誠によりて、我意中を悟れかしと物言わぬうちに示す」クララはこの時池の向うに据えてある大理石の像を余念なく見ていた。「第二を祈念の時期と云う。男、女の前に伏して懇ろに我が恋叶えたまえと願う」クララは顔を背けて

紅くれないの薔薇の花を唇につけて吹く。一ひとひら弁は飛んで波なき池みぎわの汀に浮ぶ。一弁は梅鉢の形ちに組んで池を囲える石の欄干あたに中りて敷石の上に落ちた。「次に来るは応諾の時期である。誠ありと見抜く男の心を猶も確めん為め女、男に草くさぐさ々の課役をかける。劍の力、槍の力で遂ぐべき程の事柄であるは言うまでもない」クララは吾を透す大いなる眼を翻して第四はと問う。「第四の時期を *ruerie* と呼ぶ。武もの夫のふが君の前に額ぬか付かずいて渝かわらじと誓う如く男、女の膝下しつかひざまに跪ひざまずき手を合せて女の手の間に置く。女かたの如く愛の式を返して男に接吻する」クララ遠き代の人に語る如き声にて君が恋は何れの期ぞと問う。思う人の接吻さえ得なばとクララの方に顔を寄せる。クララ頬に紅して手に持てる薔薇の花を吾が耳

のあたりに抛なげうつ。花びらは雪と乱れて、ゆかしき香りの一群れが二人の足の下に散る。……Druerieの時期はもう望めないわとウイリアムは六尺一寸の身を挙げてどさと寝返りを打つ。間けんにあまる壁を切りて、高く穿うがてる細き窓から薄暗き曙しよこう光が漏れて、物の色の定かに見えぬ中に幻影の盾のみが闇に懸る大蜘蛛おおぐもまなこの眼の如く光る。「盾がある、まだ盾がある」とウイリアムは烏からすの羽の様な滑なめらかな髪の毛を握つてがばと跳ね起る。中庭の隅では鉄を打つ音、鋼はがねを鍛える響、槌の音やすりの響が聞え出す。戦は日一日と逼せまつてくる。

その日の夕暮に一城の大衆が、無下むげに天井の高い食堂に会して晩餐ばんさんの卓に就いた時、戦の時期は愈狼將軍いよいよの口から発布された。

彼は先ず夜鴉の城主の武士道に背ける罪を数えて一門の面目を保つために七日なぬかの夜を期して、一挙にその城を屠ほふれと叫んだ。その声は堂の四壁を一周して、丸く組み合せたる高い天井に突き当ると思わるる位大きい。戦は固もとより近づきつつあった。ウイリアムは戦の近づきつつあるを覚悟の前でこの日この夜を過ごしていた。去れど今ルーフアスの口から愈七日の後と聞いた時はさすがの覚悟も蟹かにの泡あしの、蘆の根を繞めぐらぬ淡き命の如くにいずれくへか消え失せてしまった。夢ならぬを夢と置いて、思い終おほせぬ時は、無理ながら事実とあきらめらるる事もある。去れどその事実を事実と証する程の出来事が驀ぼくち地に現前せぬうちは、夢と想うてその日を過すが人の世の習いである。夢と思ふは嬉しく、思わぬがづらいからで

ある。戦は事実であると思案の臍ほぞを堅めたのは昨日や今日の事ではない。只事實に相違ないと思ひ定めた戦いが、起らんとして起らぬ為め、であれかしと願う夢の思ひは却かえつて「事實になる」の念を抑おさゆる事もあつたのであろう。一年は三百六十五日、過ぐるは束つかの間である。七日とは一年の五十分一ぶにも足らぬ。右の手を挙げて左の指を二本加えればすぐに七である。名もなき鬼に襲われて、名なき故に鬼にあらざると、強しいて思ひたるに突然正体を見付けて今更眼力の違たがわぬを口惜くちおしく思う時の感じと異なる事もあるまい。ウイリアムは真ま青つさおになつた。隣りに坐したシワルドが病氣かと問う。否と答えて盃を唇につける。充たざる酒の何に揺れてか縁を越して卓の上を流れる。その時ルーファスは再び起つ

て夜鴉の城を、城の根に張る巖いわおもろともに海に落せと盃を眉のあ
たりに上げて隼はやぶさの如く床の上に投げ下くだす。一座の大衆はフラーと
叫んで血の如き酒を啜すする。ウイリアムもフラーと叫んで血の如き
酒を啜る。シワルドもフラーと叫んで血の如き酒を啜りながら尻
目にウイリアムを見る。ウイリアムは独り立って吾室へやに帰りて、
人の入らぬ様に内側から締りをした。

盾だ愈盾だとウイリアムは叫びながら室の中をあちらこちらと
歩む。盾は依然として壁に懸っている。ゴーゴン・メジューサと
も較ぶべき顔は例に由よつて天地人を合せて呪い、過去現世げんぜ未来に
渉わたつて呪い、近寄るもの、触るるものは無論、目に入らぬ草も木
も呪いつくきでは已まぬ気色けしきである。愈この盾を使わねばならぬか

とウイリアムは盾の下にとまって壁間を仰ぐ。室の戸を叩く音のする様な気合けはいがする。耳を峙そばだてて聞くと何の音でもない。ウイリアムは又内うちぶところ懐かみげからクララの髪毛たなごころを出す。掌たなごころに乗せて眺めるかと思うと今度はそれを叮ていねい嘯しやうに、室の隅に片寄せてある三本脚の丸いテーブルの上に置いた。ウイリアムは又内懐へ手を入れて胸の隠うちしの裏うらから何か書付つかの様なもの攫つかみ出す。室の戸口まで行って横にさした鉄の棒の抜けはせぬかと振り動かして見る。締しまりは大丈夫である。ウイリアムは丸机まわしに倚よつて取り出した書付おもむを徐ろおもむに開く。紙か羊皮か慥たしかには見えぬが色合の古び具合から推すと昨今の物ではない。風なきに紙の表てが動くのは紙おのが己れと動くのか、持つ手の動くのか。書付の始めには「幻影の盾の由来」と

かいてある。すれたものか文字のあとが微かに残っているばかりである。「なんじ汝が祖ウイリアムはこの盾を北の国の巨人に得たり。

……」ここにウイリアムとあるはわが四世の祖だとウイリアムが独り言う。「黒雲の地を渡る日なり。北の国の巨人は雲の内より振り落されたる鬼の如くに寄せ来る。こぶし拳の如き瘤のつきたる鉄棒を片手に振り翳して骨も摧けよと打てば馬も倒れ人も倒れて、地を行く雲に血潮を含んで、鳴る風に火花をも見る。人を斬るの戦にあらず、脳を砕き胸を潰して、人という形を滅せざれば已まざるはげ烈しき戦なり。……」ウイリアムはたけ猛き者共よと眉をひそめて、舌を打つ。「わが渡り合ひしは巨人の中の巨人なり。銅板に砂を塗れる如き顔の中に眼懸りていなすま稲妻を射る。我を見て南方の犬尾

を捲まいて死ねと、かの鉄棒を脳天より下す。眼を遮せえぎらぬ空の二つに裂くる響おほして、鉄の瘤はわが右の肩先を滑すべる。繋つなぎ合せて肩を蔽おほえる鋼鉄の延板はがねの、尤もつとも外に向えるが二つに折れて肉に入る。吾がうちし太刀先は巨人の盾を斜ななめに研きつて憂かつと鳴るのみ。……」

ウイリアムは急に眼を転じて盾の方を見る。彼の四世の祖が打ち込んだ刀痕とうこんは歴然と残っている。ウイリアムは又読み続ける。

「われ巨人を切る事三度たび、三度目にわが太刀は鏢つばもと二元より三つに折れて巨人の戴く甲の鉢金の、内側に歪ゆがむを見たり。巨人の椎つゐを下すや四たび、四たび目に巨人の足は、血を含む泥を蹴けて、木枯の天狗てんぐの杉を倒すが如く、薊あざみの花のゆらく中に、落雷も耻はじよとばかりどうと横たわる。横たわりて起きぬ間を、疾とくも縫えるわが

短刀の光を見よ。吾ながら又なき手柄なり。……」ブラヴオーと
ウイリアムは小声に云う。「巨人は云う、老牛の夕陽に吼ゆるが
如き声にて云う。幻影の盾を南方の豎子に付与す、珍重に護持せ
よと。われ盾を翳してその所以を問うに黙して答えず。強いて聞
くとき、彼両手を揚げて北の空を指して曰く。ワルハラゆびさの国オジ
ンの座に近く、火に溶けぬ黒鉄くろがねを、氷の如き白炎に鑄たるが幻
影の盾なり。……」この時戸口に近く、石よりも堅き廊下の床を
踏みならず音がする。ウイリアムは又起つて扉に耳を付けて聴く。
足音は部屋の前を通り越して、次第に遠ざかる下から、壁の射返
す響のみが朗らかに聞える。何者か暗窖あんこうの中へ降りていったの
であろう。「この盾何の奇特きどくかあると巨人に問えば曰く。盾に願

え、願ねがうて聴かれざるなし只その身を亡ぼす事あり。人に語るな語るとき盾の靈去る。……汝盾を執つて戦に臨めば四圍の鬼神汝を呪うことあり。呪われて後蓋がいてん天蓋地の大歡喜に逢うべし。只盾を伝え受くるものにこの秘密を許すと。南国の人この不祥の具を愛せずと盾を棄てて去らんとすれば、巨人手を振つて云う。われ今浄土ワルハラに帰る、幻影の盾を要せず。百年の後南方に赤せ衣きの美人あるべし。その歌のこの盾の面おもてに触るとき、汝の児孫盾を抱いだいて抃舞べんぶするものあらんと。……」汝の児孫とはわが事ではないかとウイリアムは疑う。表に足音がして室へやの戸の前に留つた様である。「巨人は薊たおの中に斃れて、薊の中に残れるはこの盾なり」と読み終つてウイリアムが又壁の上の盾を見ると蛇の毛は

又揺うごき始める。隙間すきまなく纏もつれた中を下へ下へと潜もぐりて盾の裏側まで抜けはせぬかと疑うたわるる事もあり、又上へ上へともがき出て五寸の円の輪りん廓かくだけが盾を離れて浮き出はせぬかと思おもわるる事もある。下に動くときも上に揺り出す時も同じ様に清水しみずが滑なめらかな石の間を繋める時の様な音が出る。只その音が一本々々の毛が鳴つて一束の音にかたまつて耳じ朶だに達するのは以前と異なる事はない。動くものは必ず鳴ると見えるに、蛇の毛は悉く動いているからその音も蛇の毛の数だけはある筈であるが——如何いかにも低い。前の世の耳語きごきを奈落ならくの底から夢の間に伝える様に聞かれる。ウイリアムは茫ぼう然ぜんとしてこの微音を聞いている。戦いくさも忘れ、盾も忘れ、我身をも忘れ、戸口に人足の留つたも忘れて聞いている。ことこ

と戸をたた叩くものがある。ウイリアムは魔がついた様な顔をして動こうともしない。ことごとと再び叩く。ウイリアムは両手に紙片を捧げたまま椅子を離れて立ち上る。夢中に行く人の如く、身を向けて戸口の方にかた三歩ばかり近寄る。眼は戸の真中を見ているが瞳どうこう孔に写つて脳裏に印する影は戸ではあるまい。外の方では気が急せくか、厚いかし櫛の扉を拳こぶしにて会釈なく夜陰に響けと叩く。三度目に叩いた音が、物静かな夜を四方に破つたとき、偶像の如きウイリアムは氷盤を空裏に撃砕する如く一時に吾に返つた。紙片を急に懐ふところへかくす。叩く音は益せま逼つて絶間なく響く。開けぬかと云う声さえ聞える。

「戸を叩くは誰たぞ」と鉄の栓しんばり張をからりと外す。切り岸の様な

額の上に、赤黒き髪の斜めにかかる下から、鋭どく光る二つの眼まなこが遠慮なく部屋の中へ進んで来る。

「わしじや」とシワルドが、進めぬ先から腰懸の上にとざと尻を卸す。「今日の晩食に顔色が悪う見えたから見舞に来た」と片足を宙にあげて、残れる膝の上に置く。

「さした事もない」とウイリアムは瞬またたきして顔をそむける。

「夜よがらす鴉はばたの羽搏はばたきを聞かぬうちに、花多き国に行く気はないかとシワルドは意味有ありげ氣きに問う。

「花多き国とは？」

「南の事じや、トルバダウの歌の聞ける国じや」

「主ぬしがいぬしにたいと云うのか」

「わしは行かぬ、知れた事よ。もう六つ、日の出を見れば、夜鴉の栖すを根から海へ蹴落けおとす役目があるわ。日の永い国へ渡つたら主の顔色が善くなるうと思つての親切からじゃ。ワハハハハ」とシワルドは傍若無人に笑う。

「鳴かぬ鳥の闇に滅めり込むまでは……」と六尺一寸の身をのして胸板を拊うつ。

「霧深い国を去らぬと云うのか。その金色の髪の毛の主となら満更いや嫌でもあるまい」と丸テーブルの上を指ゆびさす。テーブルの上にはクララの髪が元の如く乗っている。内うちぶところ懐へ収めるのをつい忘れた。ウイリアムは身を伸のしたまま口籠くちごもる。

「鴉に交る白い鳩を救う気はないか」と再び叢そうちゆう中に蛇を打つ。

「今から七日過ぎた後なら……」と叢中の蛇は不意を打れて己を
得ず首を擡げかかる。

「鴉を殺して鳩だけ生かそうと云う注文か……それは少し無理じ
や。然し出来ぬ事もあるまい。南から来て南へ帰る船がある。待
てよ」と指を折る。「そうじゃ六日目の晩には間に合うだろう。

城の東の船付場へ廻して、あの金色の髪の主を乗せよう。不断は
帆柱の先に白い小旗を揚げるが、女が乗ったら赤に易えさせよう。
軍さは七日目の午過からじゃ、城を囲めば港が見える。柱の上に
赤が見えたら天下太平……」

「白が見えたら……」とウイリアムは幻影の盾を睨む。夜叉の髪
の毛は動きもせぬ、鳴りもせぬ。クララかと思う顔が一寸見えて

又もとの夜叉に返る。

「まあ、よいわ、どうにかなる心配するな。それよりは南の国の面白い話でもしよう」とシワルドは渋色の髭ひげを無雑作むざつさくに搔かいて、若き人を慰める為か話頭を転ずる。

「海一つ向むこへ渡ると日の目が多い、暖かじや。それに酒が甘くて金が落ちてている。土一升に金一升……うそじや無い、本間ほんまの話じや。手を振るのは聞きとも無いと云うのか。もう落付いて一所に話す折もあるまい。シワルドの名残の談義だと思つて聞いてくれ。そう滅めい入いらんでももの事よ」宵に浴びた酒の氣きがまだ醒さめぬのかゲーと臭いのをウイリアムの顔に吹きかける。「いやこれは御無礼……何を話す積りであつた。おおそれだ、その酒の湧わく、金の土

に交る海の向での」とシワルドはウイリアムを覗のぞき込む。

「主ぬしが女かあに可愛あいがられたと云うのか」

「ワハハハ女にも数多あまた近付はあるが、それじゃない。ボーシイルの会を見たと言いう事よ」

「ボーシイルの会？」

「知らぬか。薄黒い島国に住んでいては、知らぬも道理じゃ。プロヴオンサルの伯とツールースの伯の和睦の会はあちらで誰れも知らぬものはないぞよ」

「ふむそれが？」とウイリアムは浮かぬ顔である。

「馬は銀の沓くつをはく、狗いぬは珠の首輪いぬをつける……」

「金の林檎りんごを食くう、月の露を湯ゆに浴あびる……」と平かならぬ人の

ならい、ウイリアムは嘲あざける様に話の糸を切る。

「まあ水を指さずに聴け。うそでも興があらう」と相手は切れた糸を接つなぐ。

「試合の催しがあると、シミニアンの太守が二十四頭の白牛を駆つて埒らちの内を奇麗に地ならしする。ならした後へ三万枚の黄金を蒔まく。するとアグーの太守がわしは勝ち手にとらせる褒美ほうびを受持とうと十萬枚の黄金を加える。マルテロはわしは御馳走役じやと云うて蠟燭ろうそくの火で煮焼にたきした珍味を振舞うて、銀の皿小鉢を引出物に添える」

「もう沢山じや」とウイリアムが笑いながら云う。

「ま一つじや。仕舞にレイモンが今まで誰も見た事のない遊びを

やると云うて先まず試合の柵さくの中へ三十本の杭くいを植える。それに三十頭の名馬を繋ぐ。裸馬ではない鞍くらも置きあぶみ鐙あぶみもつけ轡くつわづな手綱きやしの華きやし奢やささえ尽してじや。よいか。そしてその真中へ鐙、刀これも三十人分、甲は無論こてすねあて小手脛こてすねあて当あてまで添えて並べ立てた。金かね高たかにしたらマルテロの御馳走おごちそうよりも、嵩かさが張ろう。それから周りへ薪たきぎを山の様に積んで、火を掛けての、馬も具足も皆焼いてしもうた。何とあちらのものは豪興をやるではないか」と話し終つてカラカラと心地よげに笑う。

「そう云う国へ行つて見よと云うに主も余程意地張りだなあ」と又ウイリアムの胸の底へ探りの石を投げ込む。

「そんな国に黒い眼、黒い髪の男は無用じや」とウイリアムは自

ら嘲る如くに云う。

「やはりその金色の髪の毛の主の居る所が恋しいと見えるな」

「言うまでもない」とウイリアムはきつとなつて幻影の盾を見る。中庭の隅すみで鉄を打つ音、鋼を鍛える響、槌の音、ヤスリの響が聞え出す。夜はいつの間にかほのぼのと明け渡る。

七日なぬかに逼る戦せまは一日の命を縮めて愈六日となつた。ウイリアムはシーワルドの勧むるままにクララへの手紙を認したためる。心が急せくのと、わきが騒がしいので思う事の万まん分一も書けぬ。「御身の髪は猶わが懐おにあり、只この使と逃げ落ちよ、疑えば魔多し」とばかりで筆を擱く。この手紙を受取つてクララに渡す者はいずこの何者か分らぬ。その頃流行はやる楽人の姿となつて夜鴉の城に忍び込

んで、戦あるべき前の晩にクララを奪い出して舟に乗せる。万一手順が狂えば隙を見て城へ火をかけても志を遂げる。これだけの事はシーワルドから聞いた、そのあとは……幻影の盾のみ知る。

逢うはうれし、逢わぬは憂し。憂し嬉しの源から珠を欺く涙が湧いて出る。この清き者に何故流れるぞと問えば知らぬと云う。

知らぬとは自然と云う意か。マリアの像の前に、ひざまず跪いて祈願を凝

せるウイリアムが立ち上ったとき、長い睫がまつげいつもより重た気に

見えたが、なぜ重いのか彼にも分らなかつた。誠は誠を自覚すれどもその他を知らぬ。その夜の夢に彼れは五彩の雲に乗るマリアを見た。マリアと見えたるはクララを祭れる姿で、クララとは地に住むマリアであろう。祈らるる神、祈らるる人は異なれど、祈

る人の胸には神も人も同じ願の影法師に過ぎぬ。祭る聖母は恋う人の為め、人恋うは聖母に跪く為め。マリアとも云え、クララとも云え。ウイリアムの心の中に二つのものは宿らぬ。宿る余地あらばこの恋は嘘うその恋じゃ。夢の続か中庭の隅で鉄を打つ音、鋼を鍛える響、槌の音、ヤスリの響が聞えて、例の如く夜が明ける。戦は愈せまる。

五日目から四日目に移るは俯ふせたる手を翻がえす間と思われ、四日目から三日目に進むは翻がえす手を故もとに還かえす間と見えて、三日、二日より愈戦の日を迎えたる時は、手さえ動かすひまなきに襲い来る如く感ぜられた。「飛ばせ」とシーワルドはウイリアムを顧みて云う。並くつわぶ轡の間から鼻嵐が立って、二つの甲が、月

下に躍る細鱗の如く秋の日を射返す。「飛ばせ」とシーワールドが踵を半ば馬の太腹に蹴込む。二人の頭の上に長く挿したる真白な毛が烈しく風を受けて、振り落さるるまでに靡く。夜鴉の城壁を斜めに見て、小高き丘に飛ばせたるシーワールドが右手を翳して港の方を望む。「帆柱に掲げた旗は赤か白か」と後れたるウイリアムは叫ぶ。「白か赤か、赤か白か」と続け様に叫ぶ。鞍壺に延び上つたるシーワールドは体をおろすと等しく馬を向け直して一散に城門の方へ飛ばす。「続け、続け」とウイリアムを呼ぶ。

「赤か、白か」とウイリアムは叫ぶ。「阿呆、丘へ飛ばすより壕の中へ飛ばせ」とシーワールドはひたすらに城門の方へ飛ばす。港の入口には、埠頭を洗う浪を食って、胴の高い船が心細く揺れて

いる。魔に襲われて夢安からぬ有様である。左右に低き帆柱を控えて、中に高き一本の真上には——「白だツ」とウイリアムは口の中で言いながら前歯で唇を噛む。折柄戦の声は夜鴉の城を撼がして、淋しき海の上に響く。

城壁の高さは四丈、丸櫓の高さはこれを倍して、所々に壁を突き抜いて立つ。天の柱が落ちてその真中に刺された如く見ゆるは本丸であろう。高さ十九丈壁の厚は三丈四尺、これを四階に分つて、最上の一層にのみ窓を穿つ。真上より真下に降る井戸の如き道ありて、所謂ダンジョンは尤も低く尤も暗き所に地獄と壁一重を隔てて設けらるる。本丸の左右に懸け離れたる二つの櫓は本丸の二階から家根付の橋を渡して出入の便りを計る。櫓

を環めぐる三々五々の建物には厩うまやもある。兵士の住居すまいもある。乱を避くる領内の細民が隠るる場所もある。後ろは切岸きりぎしに海の鳴る音を聞き、砕くる浪の花の上に舞い下りては舞い上る鷗かもめを見る。前は牛を吞むアーチの暗き上より、石に響く扉を下して、刎橋はねばしを鉄鎖に引けば人の踰こえぬ濠ほりである。

濠を渡せば門も破ろう、門を破れば天主も抜こう、志ある方に道あり、道ある方に向えとルーファスは打ち壊したる扉の隙より、黒金につつめる狼おおかみの顔を会釈もなく突き出す。あとに続けと一人が従えば、尻を追えと又一人が進む。一人二人の後には只我先にと乱れ入る。むくむくと湧く清水に、こまかき砂の浮き上りて一度に漾ただよう如く見ゆる。壁の上よりは、ありとある弓を伏せて蝟いの如

く寄手の鼻頭はななきに、鉤かぎと曲る鏃やじりを集める。空を行く長き箭やの、一矢
毎に鳴りを起せば数千の鳴りは一と塊りとなつて、地上うごめに蠢く黒
影の響に和して、時ならぬ物音に、沖の鷗を驚かす。狂えるは鳥
のみならず。秋の夕日を受けつ潜くぐりつ、甲かぶとの浪よろいの浪が寄せては
崩れ、崩れては退ひく。退くときは壁の上櫓の上より、傾く日を海
の底へ震い落す程の鬨ときを作る。寄するときには甲の浪、鎧の浪の中
より、吹き捲くる大風の息の根を一時にとめるべき声を起す。退
く浪と寄する浪の間にウイリアムとシーワルドがはたと行き逢う。
「生きておるか」とシーワルドが剣で招けば、「死ぬところじゃ」
とウイリアムが高く盾を翳す。右そばだに峙つ丸櫓の上より飛び来る矢
が憂かつと夜叉の額を掠かすめてウイリアムの足の下へ落つる。この時崩

れかかると人浪は忽ち二人の間を遮つて、鉢金を蔽う白毛の靡きさ
え、暫くしばらの間に、旋る渦の中に捲き込まれて見えなくなる。戦は
午を過ぐる二た時余りに起つて、五時と六時の間にも未だ方付か
ぬ。一度びは猛たげき心に天主をも屠ほぶる勢であつた寄手の、何にひる
んでか蒼そうぜん然たる夜の色と共に城門の外へなだれながら吐き出さ
れる。搏うつ音の絶えたるは一時の間か。暫らくは鳴りも静まる。

日は暮れ果てて黒き夜の一寸すんの隙間なく人馬を蔽う中に、碎く
る波の音が忽ち高く聞える。忽ち聞えるは始めて海の鳴るにあら
ず、吾が鳴りの暫らく已やんで空しき心の迎へたるに過ぎぬ。この
浪の音は何里の沖に萌きざしてこの磯の遠きに崩るるか、思えば古き
響きである。時の幾代を揺がして知られぬ未来に響く。日を捨て

ず夜を捨てず、二六時中繰り返す真理は永劫無極の響きを伝え
 て剣打つ音を嘲り、弓引く音を笑う。百と云い千と云う人の叫び
 の、はかなくて憐むべきを罵るときかれる。去れど城を守るもの
 も、城を攻むるものも、おのが叫びの纒かにやんで、この深き響
 きを不用意に聞き得たるとき耻ずかしと思えるはなし。ウイリア
 ムは盾に凝る血の痕を見て「汝われをも呪うか」と剣を以て三た
 び夜叉の面を叩く。ルーファスは「烏なれば闇にも隠れん月照ら
 ぬ間に斬つて棄よ」と息捲く。シーワルドばかりは額の奥に嵌め
 込まれたる如き双の眼を放つて高く天主を見詰めたるまま一言も
 いわぬ。

海より吹く風、海へ吹く風と変りて、碎くる浪と浪の間にも新

たに天地の響を添える。塔を繞る音、壁にあたる音の次第に募る
 と思ううち、城の内にて俄かに人の騒ぐ気合がする。それが漸
 々烈しくなる。千里の深きより来る地震の秒を刻み分を刻んで
 押し寄せるなど心付けばそれが夜鴉の城の真下で破裂したかと思
 う響がする。——シーワルドの眉は毛虫を撲ちたるが如く反り返
 る。——櫓の窓から黒烟りが吹き出す。夜の中に夜よりも黒き烟
 りがむくむくと吹き出す。狭き出口を争うが為めか、烟の量は見
 る間に増して前なるは押され、後なるは押し、並ぶは互に譲るま
 じとて同時に溢れ出ずる様に見える。吹き募る野分は真ともに烟
 を砕いて、丸く渦を巻いて迸る鼻を、元の如く窓へ押し返そうと
 する。風に喰い留められた渦は一度になだれて空に流れ込む。暫

くすると吹き出す烟りの中に火の粉が交じり出す。それが見る間に殖える。殖えた火の粉は烟諸もろとも共風に捲かれて大空に舞い上る。城を蔽う天の一部が櫓を中心として大なる赤き円を描いて、その円は不規則に海の方かたへと動いて行く。火の粉を梨地なしじに点じた蒔絵まきえの、瞬時の断間たえまもなく或は消え或は輝きて、動いて行く円の内部は一点として活きて動かぬ箇所はない。——「占めた」とシーワルドは手を拍うつて雀躍こおどりする。

黒烟りを吐き出して、吐き尽したる後は、太き火かえんが棒となつて、熱を追うて突き上る風諸共、夜の世界に流矢の疾ときを射る。飴あめを煮て四斗樽だる大の唧筒ポンプの口から大空に注ぐとも形容される。沸たぎる火の闇に詮せんなく消ゆるあとより又沸ぎる火が立ち騰のぼる。深き

夜を焦せとばかり煮え返るほのおの声は、地にわめく人の叫びを小こしや
 癩くなりとて空一面に鳴り渡る。鳴る中には砕けて砕けたる粉
 が舞い上り舞い下りさがつつ海の方へと広がる。濁る浪の憤る色は、
 怒る響と共に薄黒く認めらるる位なれば櫓の周囲は、煤すすを透す日
 に照さるるよりも明かである。一枚の火の、丸形に櫓を裏つつんで飽
 き足らず、横に這うてひめがきの胸先にかかる。炎は尺を計つて左へ左
 へと延びる。たまたま一陣の風吹いて、逆に舌先を払えば、左へ
 行くべき鋒ほこさきを転じて上に向う。旋めぐる風なれば後ろより不意を襲う
 事もある。順に撫でてを馳かけ抜ける時は上に向えるが又向き直
 りて行き過ぎし風を追う。左へ左へと溶けたる舌は見る間に長く
 なり、又広くなる。果は此所ここにも一枚の火が出来る、かしこにも

一枚の火が出来る。火に包まれたるの上を黒き影が行きつ戻りつする。たまには暗き上から明るき中へ消えて入ったぎり再び出て来ぬのもある。

焦^やけ爛^{ただ}れたる高櫓の、機熟してか、吹く風に逆^さいてしばらくはと共に傾くと見えしが、奈落までも落ち入らでやはと、三分二を岩に残して、倒^さしまに崩れかかる。取り巻くの一度にパツと天地を燬^やく時、の上に火の如き髪を振り乱して佇^たむ女^たがある。

「クララ！」とウイリアムが叫ぶ途端に女の影は消える。焼け出された二頭の馬が鞍付のまま宙を飛んで来る。

疾く走る尻尾^{しりお}を攫^{つか}みて根元よりスパと抜ける体なり、先なる馬がウイリアムの前にて礎^{はた}ととまる。とまる前足に力余りて堅き爪

の半ばは、斜めに土に喰い入る。盾に当る鼻づらの、二寸を隔てて夜叉の面に火の息を吹く。「四つ足も呪われたか」とウイリアムは我とはなしに鬣たてがみを握りてひらりと高き脊またに跨またがる。足乗せぬあぶみ鐙あぶみは手持無沙汰に太腹を打つて宙に躍る。この時何物か「南の国へ行け」と鉄被きる剛かたき手を挙げて馬の尻をしたたかに打つ。「呪われた」とウイリアムは馬と共に空くうを行く。

ウイリアムの馬を追うにあらず、馬のウイリアムに追わるるにあらず、呪いの走るなり。風を切り、夜を裂き、大地に疇かんぼし走る音を刻んで、呪いの尽くる所まで走るなり。野を走り尽せば丘に走り、丘を走り下れば谷に走り入る。夜は明けたのか日は高いのか、暮れかかるのか、雨か、霰あられか、野分のわきか、木枯か——知らぬ。呪い

は真一文字に走る事を知るのみじゃ。前に当るものは親でも許さぬ、石蹴る蹄ひづめには火花が鳴る。行手を遮さえぎるものは主しゅでも斃たおせ、闇吹き散らす鼻嵐を見よ。物凄き音の、物凄き人と馬の影を包んで、あつと見る睫まつげの合あわぬ間に過ぎ去るばかりじゃ。人か馬か形か影かと惑まどうな、只呪いその物の吼たけり狂くるうて行かんと欲する所に行く姿と思え。

ウイリアムは何里飛ばしたか知らぬ。乗り斃した馬の鞍に腰を卸して、右手めでに額を抑えて何事をか考いえ出いさんと力つとめている。死したる人の蘇よみがえる時に、昔しの我と今の我との、あるは別人の如く、あるは同人の如く、繋つなぐ鎖くわりは情けなく切れて、然しかも何等かの関係あるべしと思ひ惑まどう様である。半時なりとも死せる人の頭脳に

は、喜怒哀樂の影は宿るまい。空むなしき心のふと吾に歸りて在りし昔を想い起せば、油ゆうぜん然として雲の湧わくが如くにその折々は簇むらがり来るきたであろう。簇むらがり来るものを入るる余地あればある程、簇むらがる物は迅速に脳裏を馳めげ廻るであろう。ウイリアムが吾に醒さめた時の心が水の如く涼しかっただけ、今思い起すかれこれも送迎いとまに違ちがなきまで、糸と乱れてその頭を悩なましている。出陣、帆柱の旗、戦……と順を立てて排列して見る。皆事実としか思われぬ。

「その次に」と頭の奥を探るとぺらぺらと黄色な が見える。

「火事だ！」とウイリアムは思わず叫ぶ。火事は構わぬが今心の眼に思い浮べた の中にはクララの髪の毛ただよが漾たっている。何故あの火の中へ飛び込んで同じ所で死ななかつたのかとウイリアムは

舌打ちをする。「盾の仕業だ」と口の内でつぶやく。見ると盾は馬の頭を三尺ばかり右へ隔てて表を空にむけて横わっている。

「これが恋の果か、呪いのろが醒めても恋は醒めぬ」とウイリアムは又額を抑えて、己れを煩悶はんもんの海に沈める。海の底に足がついて、世に疎うときまで思い入るとき、何処いずくよりか、微かすかなる糸を馬の尾で摩こする様な響が聞える。睡るウイリアムは眼を開いてあたりを見廻す。ここは何処とも分らぬが、目の届く限りは一面の林である。林とは云え、枝を交えて高き日を遮おほぎる一抱かかえ二抱えの大木はない。木は一坪に一本位の割でその大さも径六七寸位のもののみであらう。不思議にもそれが皆同じ樹である。枝が幹の根を去る六尺位の所から上を向いて、しなやかな線を描いて生えている。そ

の枝が聚あつまって、中が膨ふくれ、上が尖とがって欄干の擬宝珠ぎぼうしゆか、筆の穂の水を含んだ形状をする。枝の悉くは丸い黄な葉を以もつて隙間なきまでに綴つられているから、枝の重なる筆の穂は色の変る、面長な葡萄の珠で、穂の重なる林の態さまは葡萄の房の累々と連なる趣きがある。下より仰げば少しずつは空も青く見らるる。只眼を放つ遙はるむこうか向の果に、樹の幹が互たがいに近づきつ、遠とおざかりつ黒くならぶ間に、澄み渡る秋の空が鏡の如く光るは心行く眺めである。時々鏡の面を羅うすものが過ぎ行さま様まで横から見える。地面は一面の苔こけで秋に入つて稍黄食ややきばんだと思われる所もあり、又は薄茶に枯れかかった辺もあるが、人の踏んだ痕あとがないから、黄は黄なり、薄茶は薄茶のまま、苔と云う昔しの姿を存している。ここかしこに齒しだ朶の茂り

が平かな面を破つて幽情を添えるばかりだ。鳥も鳴かぬ風も渡らぬ。寂然せきぜんとして太古の昔を至る所に描き出しているが、樹の高からぬのと秋の日の射透すので、さほど静かな割合に怖い感じが少ない。その秋の日は極きわめて明あきらかな日である。真上から林を照らす光線が、かの丸い黄な無数の葉を一度に洗つて、林の中は存外明るい。葉の向きは固もとより一様でないから、日を射返す具合も悉く違う。同じ黄ではあるが透明、半透明、濃き、薄き、様々の趣向をそれぞれに凝こらしている。それが乱れ、雑まじり、重なつて苔の上を照らすから、林の中に居るものは琥珀こはくの屏びょうめくを繞らして間接に太陽の光りを浴びる心地である。ウイリアムは醒めて苦しく、夢に落付くという容ようす子に見える。糸の音ねが再び落ちつきかけた耳じ朶だ

に響く。今度は怪しき音の方へ眼をむける。幹をすかして空の見える反対の方角を見ると——西か東か無論わからぬ——爰こゝばかりは木が重なり合おうて一畝程は際立きわだつ薄暗さを地に印する中に池がある。池は大きくはない、出来損そこないの瓜うりの様に狭き幅を木陰に横たえている。これも太古の池で中に湛たえるのは同じく太古の水であろう、寒気がする程青い。いつ散つたものか黄な小さき葉が水上に浮いている。ここにも天あめが下の風は吹く事があると見えて、浮ぶ葉は吹き寄せられて、所々にかたまっている。群を離れて散っているのはもとより数え切れぬ。糸の音は三たび響く。滑なめらかなる坂を、護ゴム謨の輪が緩ゆるゆる々練り上る如く、低くきより自然に高き調子に移りてはたとやむ。

ウイリアムの腰は鞍くらを離れた。池の方に眼を向けたまま音ある方かたおもむへ徐ろに歩を移す。ぼろぼろと崩るる苔の皮の、厚く柔らかなれば、あるく時も、坐れる時の如く林の中は森しんとして静かである。足音に我が動くを知るものの、音なければ動く事を忘るるか、ウイリアムは歩むとは思わず只ふらふらと池の汀みぎわまで進み寄る。池幅の少しく逼りせまたるに、臥ふす牛を欺く程の岩が向側から半ば岸に沿うて蹲うずくま踞れば、ウイリアムと岩との間は僅わずか一丈余ならんと思われる。その岩の上に一人の女が、眩まぼゆしと見ゆるまでに紅なる衣を着て、知らぬ世の楽器を弾ひくともなしに弾いている。碧みどり積む水が肌に沁しむ寒き色の中に、この女の影を倒さかしまにひたす。投げ出いだしたる足の、長き裳もすそに隠くるる末まで明かに写る。水は元よ

り動かぬ、女も動かねば影も動かぬ。只弓を擦る右の手が糸に沿うてゆるく揺く。頭を纏う、糸に貫いた真珠の飾りが、湛然たる水の底に明星程の光を放つ。黒き眼の黒き髪の水である。クララとは似ても似つかぬ。女はやがて歌い出す。

「岩の上なる我がまことか、水の下なる影がまことか」

清く淋しい声である。風の度らぬ梢から黄な葉がはらはらと赤き衣にかかりて、池の面に落ちる。静かな影がちよと動いて、又元に還る。ウイリアムは茫然として佇ずむ。

「まこととは思ひ詰めたる心の影を。心の影を偽りと云うが偽り」
女静かに歌いやんで、ウイリアムの方を顧みる。ウイリアムは瞬きもせず女の顔を打ち守る。

「恋に口惜しき命の占を、盾に問えかし、まぼろしの盾」

ウイリアムは崖を飛ぶ牡鹿の如く、踵をめぐらして、盾をとつ

て来る。女「只懸命に盾の面を見給え」と云う。ウイリアムは無

言のまま盾を抱いて、池の縁に坐る。寥廓なる天の下、蕭

瑟なる林の裏、幽冷なる池の上に音と云う程の音は何にも聞え

ぬ。只ウイリアムの見詰めたる盾の内輪が、例の如く環り出すと

共に、昔しながらの微かな声が彼の耳を襲うのみである。「盾の

中に何をか見る」と女は水の向より問う。「ありとある蛇の毛の

動くは」とウイリアムが眼を放たずに答える。「物音は？」「鷺

筆の紙を走る如くなり」

「迷いては、迷いてはしきりに動く心なり、音なき方に音をな聞

きそ、音をな聞きそ」と女半ば歌うが如く、半ば語るが如く、岸を隔ててウイリアムに向けて手を波の如くふる。動く毛の次第にやみて、鳴る音も自おのずから絶ゆ。見入る盾の模様は霞かすむかと疑われ、程なく盾の面に黒き幕かかる。見れども見えず、聞けども聞えず、常とこやみ闇の世に住む我を怪しみて「暗し、暗し」と云う。わが呼ぶ声のわれにすら聞かれぬ位かす幽かなり。

「闇に烏を見ずと嘆かば、鳴かぬ声さえ聞かんと恋わめ、——身をも命も、闇に捨てなば、身をも命も、闇に拾わば、嬉しかろうよ」と女の歌う声が百尺せきの壁を洩もれて、蜘蛛くもの囿いの細き通い路より来きたる。歌はしばし絶えて弓擦る音の風誘う遠きより高く低く、ウイリアムの耳に限りなき清涼の気を吹く。その時暗き中に一点

はくぎよく

白玉の光が点ぜらるる。見るうちに大きくなる。闇のひくか、光りの進むか、ウイリアムの眼の及ぶ限りは、四面空蕩万里の層氷を建て連らねたる如く豁かになる。頭を蔽う天もなく、足を乗する地もなく冷瓏虚無の真中に一人立つ。

「君は今いづくに居わすぞ」と遙かに問うはかの女の声である。「無の中か、有の中か、玻璃瓶の中か」とウイリアムが蘇がえれる人の様に答える。彼の眼はまだ盾を離れぬ。

女は歌い出す。「以太利亞の、以太利亞の海紫に夜明けたり」「広い海がほのぼのとあけて、……橙色の日が浪から出る」

とウイリアムが云う。彼の眼は猶盾を見詰めている。彼の心には身も世も何もない。只盾がある。髪の毛の末から、足の爪先に至る

まで、五臓六腑を挙げ、耳目口鼻じもくこうびを挙げて悉く幻影の盾である。彼の総身は盾になり切っている。盾はウイリアムでウイリアムは盾である。二つのものが純一無雜の清淨しやうじやうかい界かいにぴたりと合うたとき——以太利亞の空は自おのずから明けて、以太利亞の日は自おのずから出る。

女は又歌う。「帆を張れば、舟も行くめり、帆柱に、何を掲げて……」

「赤だつ」とウイリアムは盾の中に向つて叫ぶ。「白い帆が山影を横よこぎつて、岸に近づいて来る。三本の帆柱の左右は知らぬ、中なる上に春風しゆんぷうを受けて棚曳たなびくは、赤だ、赤だクララの舟だ」：舟は油の如く平たいらなる海を滑つて難なく岸に近づいて来る。舳へさきに

金色きんいろの髪を日に乱して伸び上るは言うまでもない、クララである。

ここは南の国で、空には濃き藍あゐを流し、海にも濃き藍を流してその中に横よこたわる遠山とおやまもまた濃き藍を含んでいる。只春の波のちよろちよろと磯を洗う端だけが際限なく長い一条の白布と見える。丘には橄欖かんらんが深緑りの葉を暖かき日に洗われて、その葉裏にはももどり百千鳥をかくす。庭には黄な花、赤い花、紫の花、紅くれないの花——凡すべての春の花が、凡ての色を尽くして、咲きては乱れ、乱れては散り、散りては咲いて、冬知らぬ空を誰たれに向つて誇る。

暖かき草の上に二人が坐つて、二人共に青絹を敷いた様な海面を遙かの下に眺めている。二人共に斑入ふいりの大理石の欄干に身

をもた靠せて、二人共に足を前に投げ出してゐる。二人の頭の上から欄干を斜めに林檎りんごの枝が花の蓋かさをさしかける。花が散ると、あるときはクララの髪の毛にとまり、ある時はウイリアムの髪の毛にかかる。又ある時は二人の頭と二人の袖にはらはらと一度にかか
る。枝から釣るす籠かごの内うちで鸚鵡おうむが時々けたたましい音ねを出す。

「南方の日の露に沈まぬうちに」とウイリアムは熱き唇をクララの唇につける。二人の唇の間に林檎の花の一片ひとひらがはさまつて濡ぬれたままつている。

「この国の春は長えぞとこし」とクララ窘たしなめる如くに云う。ウイリアムは嬉しき声に Druerie ! と呼ぶ。クララも同じ様に Druerie ! と云う。籠の中なる鸚鵡がが Druerie ! と鋭とどき声を立てる。遙か下な

る春の海もドルエリと答える。海の向うの遠山もドルエリと答える。丘を蔽う凡ての橄欖かんらんと、庭に咲く黄な花、赤い花、紫の花、紅の花——凡ての春の花と、凡ての春の物が皆一斉にドルエリと答える。——これは盾の中の世界である。しかしてウイリアムは盾である。

百年の齡よわいは目出度めでたくも難ありがた有たい。然しちと退屈たのしみじや。楽も多か

ろうが憂も長かろう。水臭い麦酒ビールを日毎に浴びるより、舌を焼く

酒アルコール精アルを半滴味わう方が手間がかからぬ。百年を十で割り、十

年を百で割つて、剩あますところの半時に百年の苦樂を乗じたらやはり百年の生を享うけたと同じ事じや。泰山もカメラの裏うちに収まり、水素も冷ゆれば液となる。終生の情けを、分ぶんと縮め、懸命の甘き

を点と凝らし得るなら——然しそれが普通の人に出来る事だろう
 か？ ——この猛烈な経験を嘗め得たものは古往今来ウイリアム
 一人である。（二月十八日）

青空文庫情報

底本：「倫敦塔・幻影の盾」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年7月10日初版発行

1968（昭和43）年9月15日20刷改版発行

1997（平成9）年4月25日69刷発行

※底本本文では、「※」[#「くさかんむり／（酉+佳）／れんが
「、第3水準1-91-44」《ひた》す」は、「くさかんむり／（酉+
佳）」とつくってある。しかし、下記の異本とも照合の上、当該
の箇所は「くさかんむり／（酉+佳）／れんが」で入力した。

「倫敦塔・幻影の盾」岩波文庫、岩波書店

1930（昭和5）年12月20日第1刷発行

1990（平成2）年4月16日第23刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第30刷発行

ちくま文庫「夏目漱石全集2」筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日初版第1刷発行

親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

入力：藤本篤子

校正：かとうかおり

1998年9月19日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幻影の盾

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>